

第3回 日本漢字能力検定 試験問題

氏名

1 級

解答は、現代仮名遣いによるものとする。

解答は別紙(答案用紙)に書くこと。

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。(30)
1〜20は音読み、21〜30は訓読みである。

(二) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。(40)
19、20は国字で答えること。

(三) 次の1〜5の意味を的確に表す語を、後の□から選び、漢字で記せ。(10)
2×5

- 春日遅遅として卉木萋萋^{せいせい}たり。
- 浅深粧^まい駁^さ落^{らく}たり、高下火参差^{さんさし}たり。
- 田の高下礲^{ろう}映^{えい}宜^いしき所に随^{したが}いて雑植^{ざつちつ}す。
- 消化管の壅塞^{おうさく}所謂膈^{かく}噎^{えつ}の病を患^うう。
- 不始末^{ふしまつ}を為^な出来し散散^{さんさん}に打擲^{うちてつ}された。
- 略千鎰^{りやくせんい}の価^けで引き取られた。
- 草臥^{くさひ}れた繭^{まゆ}紬^{ちゅう}の羽織^{うおり}を引^ひつ掛^かけている。
- 子貢^{しこう}、師の言^{こと}を聞^ききて吁^{あや}然^{ぜん}たり。
- 時朏^{ときへい}朏^{へい}として且^{かつ}に旦^{たん}ならんとす。
- 詆訐^{ていぎ}の民有^ありと雖^いも依^よる所無^なし。
- 君に勸^{すす}む金屈^{きんくつ}厄^{やく}、満酌^{まんしやく}辞^{こと}するを須^{もと}いず。
- 家皆亡滅^{けがいてつ}して衆庶^{しゅうじよ}の中に汨没^{こくぼつ}す。
- 何れの時か杯^{はい}を傾^{かた}け壺罍^{ころう}を竭^{くつ}くさん。
- 珥^に貂^{じよう}の頭官^{とうくわん}中一際^{いつさい}權勢^{けんせい}を揮^ひった。
- 靈牀^{りようじよう}上の屏風^{びんぷう}、出^でして之^{これ}を暴曬^{ぼうざい}す。
- 生死^{しんじ}は人の常^{じょう}、何ぞ怕^{おそ}怯^{けつ}するを須^{もと}いん。
- 世に母望^{ぼぼう}の福有^あり、又母望^{ぼぼう}の禍有^あり。
- 委虺^{ゑい}虎^こに似^にて角有^{かくあ}り、能^よく水中^{すいじゆう}を行^いく。
- 言唯唯^{ごんゑゑ}として笑^{わら}い哇^わたり。
- 痴兒^{ちゑ}呉歌^ごを踏^ふみ姪姪^{あたま}鵲^{せき}音^{おん}を足^あす。
- 巫山戲^いて喉^{のど}すのではなかつた。
- 私^わかに嫂^{せう}に思^{おも}いを寄^よせていた。
- 簪^{かん}を撓^かむるに片目^{ぺんめ}をふさぎてす。
- 秋刈^{あき}り冬収^{ふゆ}むる騒^{さわ}きはなし。
- 是^{こゝ}に究^{きう}め是^{こゝ}に図^ずり亶^{たふ}に其然^{そのぜん}るか。
- 安宅^{あんたく}を曠^{くわう}しくして居^ゐらず。
- 朕^{みづか}が志^し先^{せん}ず定^{さだ}まり詢^{ゆん}謀^{ぼう}僉^{かん}同^{どう}じなり。
- 則^{すなは}ち席^{せき}を布^ふくに席間^{せきかん}に丈^{さか}を函^はる。
- 誰^{たれ}か其^{その}之^{これ}を尸^{しか}る、斉^あせる季女^{きよめ}有^あり。
- 上孤^{じやうこ}を恤^これみて民倍^{たふ}かず。

- 車のフロントがヒシヤ^{ひしや}げている。
- 辺^へり憚^{はた}らずキワド^{きわど}い話^わをする。
- 意^い想^{さう}外^{がい}にテコズ^{てこず}った。
- 涙^{なみだ}がサンゼン^{さんぜん}と頬^ほを伝^{つた}った。
- サ^さザ^ざかし無^な念^{ねん}であつたろう。
- ヒダル^{ひだる}い腹^{はら}をかかえて歩^{ある}き続^{つづ}けた。
- トウ椅子^{いす}の上^{うへ}で微^さ睡^{すい}む。
- 御^ごケンコ^{けんこ}に与^より感^{かん}謝^{しゃ}に堪^たえません。
- 彼女^{かのめ}の一言^{ひとこと}がテキメン^{てきめん}に効^きいた。
- グハン^{ぐはん}少年^{しょうねん}と認^とめる事^{こと}由^{よし}を挙^あ示^しする。
- ビヨウ^{びよう}ウ^うのため欠^け席^{せき}すると連^{れん}絡^{らく}があつた。
- シヨウ^{しょう}ウ^うシヤ^{しや}な身^み形^{がた}で会^{かい}場^{じやう}に姿^{すがた}を見^みせた。
- 山の芋^{いも}をワラヅト^{わらづと}に包^{つつ}んで持^も参^{さん}する。
- 仏^{ぶつ}・菩^ぼ薩^{さく}が神^{かみ}となつてスイ^{すい}ジヤク^{じゃく}する。
- 故^こ人^{にん}のミエイク^{みえいく}が厳^{げん}か^かに執^{しつ}行^{ぎやう}われた。
- 旧^{きう}家^けの令^{れい}嬢^{じやう}としてのキヨウ^{きよう}ウジ^{うじ}があつた。
- 天^{てん}才^{さい}を謳^{うた}わ^われる梨^り園^{えん}のキヨウ^{きよう}ウジ^{うじ}である。
- 本^{ほん}尊^{そん}の左^{ひだり}右^{みぎ}にキヨウ^{きよう}ウジ^{うじ}が描^{えが}かれてい^る。
- 名^なを聞^きく^くなりヤガ^{やが}て涙^{なみだ}に咽^{のど}んだ。
- 湖^{うみ}の魚^{いさな}道^{みち}にエリ^{えり}を仕^し掛^かける。

- くつろいで過^{すご}ごす。暇^{ひま}で家^{いへ}にい^る。
- 囲碁^{いご}に耽^{たふ}る。遊^{あそ}びに夢^{ゆめ}中^{ちゆう}にな^る。
- 托鉢^{たくはく}あるいは乞^こ食^{じき}。
- 通^{つう}訳^{やく}官^{くわん}。通^{つう}辞^じ。通^{つう}弁^{べん}。
- どつちつかずのあいまいな態^{たい}度^ど。

あんご・いい・いんいつ
えんきよ・しょうしょ・ぼうよう
らさい・らんか

(四) 次の問1と問2の四字熟語について
答えよ。(30)

問1
次の四字熟語の(1〜10)に入る適切な
語を後の□から選^えび漢^{かん}字^じ二^に字^じで記^しせ。(20)
2×10

- | | |
|--------|--------|
| (1) 三尺 | 気韻(6) |
| (2) 当路 | 菜圃(7) |
| (3) 毛長 | 咬文(8) |
| (4) 在側 | 暗香(9) |
| (5) 殉葬 | 兵馬(10) |

こうそう・さいろう・しゃくじ
すいぜん・せいどう・そえい
ばくろう・ばそう・ふくこう
らんてい

問2
次の1〜5の解説・意味にあてはまる
四字熟語を後の□から選^えび、その傍
線部分だけの読みをひらがなで記^しせ。(10)
2×5

- 親^{おや}を思^{おも}う心^{こころ}の切^きなること。
- 心^{こころ}配^{はい}りが行^いき届^{とど}いてい^ること。
- な^なりふ^りりかまわ^わずこ^こびへ^へつ^つらう例^{れい}え。
- 広^{ひろ}く学^{がく}び見^み識^{しき}を高^{たか}める。
- 外^{がい}敵^{てき}の侵^{しん}略^{りやく}を寄^よせ付^つけぬ国^{くに}の喩^よ。

瑣^さ碎^{さい}細^{さい}膩^膩・鑿^{さく}窓^{そう}啓^{けい}牖^う・讒^{さん}諂^{てん}面^{めん}諛^う
吮^{しん}癰^{よう}舐^し痔^し・伯^{はく}兪^う泣^{なき}杖^{じやう}・衣^い錦^{きん}尚^{しょう}綱^{かう}
中^{ちゆう}権^{けん}後^ご勁^{けい}・金^{きん}甌^{おう}無^む欠^{けつ}

1級

解答欄を間違えないよう設問番号を確認してください。

氏名

(五) 次の熟字訓・当て字の読みを記せ。

- 1 海豹
2 金糸魚
3 河貝子
4 専女
5 丁翁
6 噴雪花
7 射干玉
8 灯台木
9 媒鳥
10 埃及

(10)
1×10

(七) 次の1～5の対義語、6～10の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。

□の中の語は一度だけ使うこと。

対義語

類義語

- 1 陞叙
2 謙退
3 直参
4 出離
5 鴟梟
6 貴紳
7 寄進
8 妄誕
9 放縦
10 鴻基

(八) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分(20)を漢字で記せ。

(20)
2×10

- 1 大は棟梁と為し、小はスイカクと為す。
2 イガグリも内から割れる。
3 咽喉ユウヒの地。
4 身を終うるまでク口を譲りても一段を失わず。
5 ウジサジ物言わず。
6 家にヘイソウ有り、之を千金に享つ。
7 ゲンケンの貧。
8 命を信ずる者はジュヨウ亡し。
9 シュソクの頭目を扞ぐが如し。
10 シンリヨウを積むが如し。

(六) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを(送り)がなに注意してひらがなで記せ。

(10)
1×10

〈例〉健勝……勝れる ↓

けんしょう
すぐ

- ア 1 溥天……2 溥い
イ 3 惕陰……4 惕る
ウ 5 嫗育……6 嫗める
エ 7 繳進……8 繳める
オ 9 拆閱……10 拆く

(九) 文章中の傍線(1～10)のカタカナを漢字に直し、波線(ア～コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。

(30)
2×10
1×10

【A】 城中荒廃凄涼として賊徒処々に集群して縦にロリヤクし、逃走する者あり、キユウコクする者あり。其の惨状見るに忍びず。スミスチヨウゼンとして彼マリーを憂い、其の家に詣りて流覽すれば、銀台瑤欄は已に廃園頽牆となれり。然れどもマリーの室は猶依然として存し、薰炉香残して恵帳空しく張り、窈窕人去りて風氣亦腥し。スミス之を見て佇立タ⁴ンサセり。会マリーの小妹ダリスの来るあり。乃ち問いて曰く、マリーは今安^{いず}くに在るや。ダリス一寺門を指して曰く、彼ここに在り。スミス即ち之に赴き、寺僧を呼び其の状を訊わんとす。

(プーシキン「露国奇聞 花心蝶思録」(高須治助訳)より)

【B】 彼をして經典に倚らしめたるもの、抑いかなる鬼物の神力ならん。他ならず、この一瞬時の発露刀なり、心機妙変なり。彼の如きものをして、志の壮偉なる事は全盛の平家を倒して孤島ヒヨウラクの人を起こす程にありて、而して胸中一物の希うところなく、ただ一寺の建立を願欲せしむるに過ぎざりしもの、抑奈何の故ある。曰く彼時の変化なり。熱烈の舌一世を罵り、豪快天地を嘲るが如き挙動を為しながら、別に一片の真率無慾なるところ、専念回向するところ、メイモク静思する処、殆ど数個の人あるが如き観あるもの、何ぞや。曰く、彼時の発心なり、彼時の心機妙変なり。噫この荒法師が、筐中常に彼可憐の貞女の遺魂を納めて、その重荷を取り去ることを得ざりしと、ケンバクに難行して、胸中の苦熱鎮し難き痛悩とは、アニ生悟りの聖僧の能く味わうを得るところならんや。

(北村透谷「心機妙変を論ず」より)

【C】 思えば能士の尊敬、美人の圍繞も、富豪其の人を尊敬し、其の人を圍繞するに非ずして、富豪其の物を尊敬し、其の物を圍繞するに止まり、其の物を蚕食し了れば、啻に其の人の艱厄を痛歎せざるのみならず、進んで之を死地に陥落することさえ有れば、雍々たる歡樂を極むるも、ムリ仮空の歡樂にて、俳優の舞台に瓊筵を催すに異ならず。況んや、リンシヨクけちん坊、貨幣の中に起臥するに至つては、鉞山の巖窟に投じて餓鬼の所行を倣うに違わんや。豹死して皮を留め、人死して名を留む。忠臣の奸邪を除き、節士の大難に斃るる、芳名を永遠に伝うるやに思われるれど、姓名を記憶する者なく、事蹟を称揚する者なく、幽谷の樵叟^ク獵夫、曠野の蚊蚋^ク蜂蝶と均しく永く凋落^コ堙滅に帰し終わらん。

(三宅雪嶺「哲学涓滴」より)